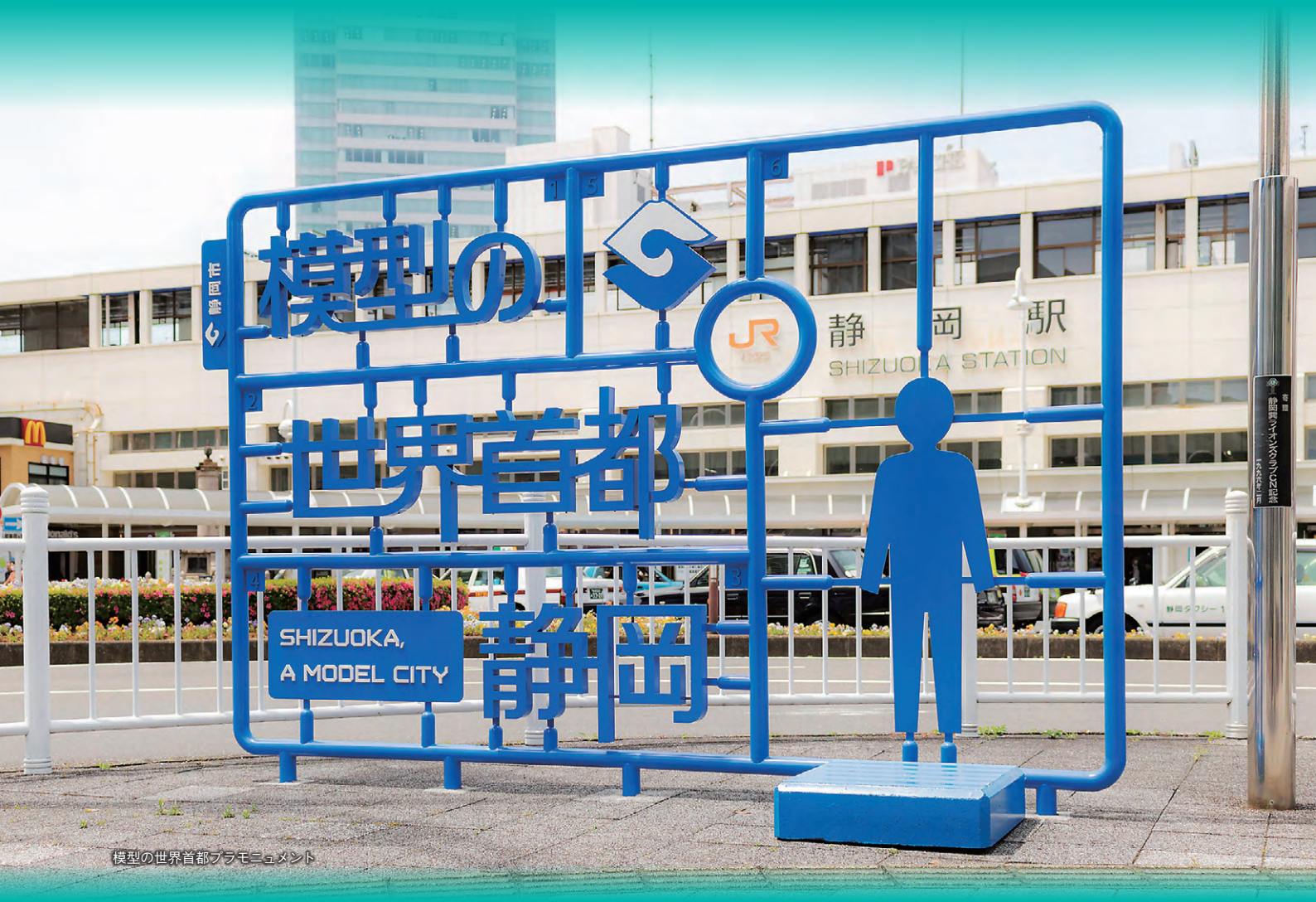
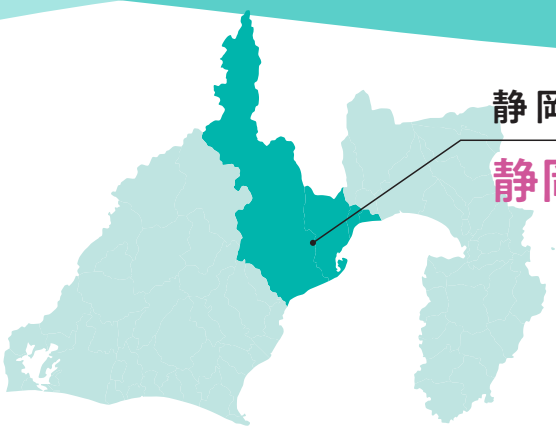
※写真提供：静岡市

地域を元気に!!
わがまちの
活力
アップ



模型の世界首都プラモニュメント

官民連携による「静岡市プラモデル化計画」で地域に笑顔があふれる静岡市



静岡といえばお茶やミカンが特産品として有名であるが、今、静岡市には“プラモデル”をきっかけに国内外から多くの人が訪れているのをご存じだろうか？　その立役者となるのが「静岡市プラモデル化計画」だ。官民連携による地方創生プロジェクトで、プラモデルを活用した世界に誇るシティプロモーションとして、数々のデザイン・広告賞も受賞している。子どもから高齢者まで、地域に笑顔があふれる静岡市。成功の秘訣とは、そして、これから先に描く未来像とは……？　担当者に話を聞いた。

自然に囲まれた地形を活かして木材加工・木材模型が発展した静岡

豊かな自然に囲まれ、豊富な森林資源を持つ静岡では、古くから木材加工が盛んであった。全国各地から優秀な職人が集まり、生まれた匠の技には、駿河竹千筋細工、駿河漆器、駿河蒔絵などがある。こうした伝統工芸の技は、やがて木製模型へと受け継がれ、静岡ではプラモデルの原点ともいえる木製模型産業が発展した。

1950年代に入ると、海外からプラモデルが輸入され始め、模型の主流も木製からプラスチックへと転換を余儀なくされた。素材の変化は、知識はもちろん、技術も資金も人材も新たに求められることから、その対応は容易なことではない。当時の職人たちは、情熱、知識、努力のすべてをかけてこの転換期を乗り越え、現在のプラモデルメーカーへと成長を遂げたことが、今に語り継がれている。

日本一のプラモデルの出荷額そこに着目して事業をスタート

現在、静岡市内には複数の模型メーカーが本社や事務所を構える。また、プラモデルやラジコン、鉄道模型をはじめとした模型の数々が一堂に会する「静岡ホビーショー」は、1959年から続く国内最大級の模型展示会として、業界関係者や模型ファンには広く知られてきた。こうした背景もあり、静岡市はプラモデルの出荷額が日本一、国内シェアは80%以上を誇る。

この点に着目し、2007年度から始まったのが「ホビーのまち静岡推進事業」だ。

「伝統的な産業、固有の文化を持つ静岡において、新たな地域ブランドの創出を目指していたところ、製造品出荷額が日本一のプラモデルに着目し、行政が主体となってこの事業を立ち上げたのがきっかけです」と話してくれたのは、静岡市経済局商工部産

静岡ホビーショー

業振興課プラモデル振興係の櫻井国登さんだ。
“プラモデル”を核とした“ホビー”と、その根底にある“ものづくり”をまちのブランドイメージとして掲げた「ホビーのまち静岡推進事業」は、一年目こそ行政が主体となって実施したが、翌2008年には、市内の模型メーカー等によって「ホビーのまち静岡実行委員会」が発足し、双方が協力するかたちで展開される。

この委員会を引き継ぐかたちで、2012年には模型メーカー各社に加え、市の伝統工芸品を守り発信する静岡特産工業協会、静岡商工会議所によって「ホビー推進協議会静岡」が設立され、行政とメーカー、協議会などが協力し合いながら地域経済の活性化と地場産業の発展に力を注いできた。

2020年に開始した官民連携による「静岡市プラモデル化計画」

2020年からは、官民連携による「静岡市プラモデル化計画」がスタートしている。模型メーカーのみならず、民間企業の力も借りて、より一層プラモデルを活かした地方創生を推進しようと立ち上がったプロジェクトである。率直に、官民連携に移行して良かった点を聞くと、こんな答えが返ってきた。
「これまでもプラモデルを活用したシティプロモーションをやってきましたが、浸透する速度が圧倒的に速いということです」（櫻井さん）

関わる人間や組織が増えると稼働する力も大きくなる一方で、苦労も増えるのではないかという懸念も否めないが、そのあたりはどうだったのだろう。
「確かに、関係者が増えると事業を進める際の調整は大変かもしれません。できる限り関わってくださっている多くの人に納得いただいて事業を進めたいので、いろいろなところに意見や要望を聞き、それを集約するのは大変ではあります。けれど、大変さよりメリットのほうが上回ると思います。関わっていただく人が増えることで、知識、つながり、広がりが増していることを実感しています。だから、大変さよりも行政に力を貸してもらえているというメリットのほうが大きいと感じます」（櫻井さん）

環境・人材・コンテンツづくりという3つの柱を軸に取り組む多彩な展開

では、具体的にどのような取り組みを実施してきたのだろうか。「静岡市プラモデル化計画」は、①環境づくり、②人材づくり、③コンテンツづくり、といった3つの柱を軸に、様々な事業を展開している。

①の環境づくりとは、市民はもちろん市外から来た人が「静岡市＝プラモデルのまち」と認識できるような環境をつくろうというものだ。これには、組み立て前のプラモデルを模した巨大な「プラモニュメント」が一役買っている。2025年3月時点で14か所15基が静岡市内に設置されているが、15基のうち5基は静岡市で作り、残りの10基は民間企業によるものだという。
「プラモニュメントはプラモデル化計画のシンボル的存在です。最初は先進的すぎて躊躇する声もあったのですが、実際に設置したところ反響が大きく、それを見て次々に協力してくださる民間企業さんが増えていきました」と話してくれたのは、同じくプラモデル振興係の堀郁矢さんだ。

目に見えるかたち、視覚効果というのは大きい。市民からは「愛着がわく」「プラモデルのまちとしての自覚が生まれた」といった声が届き、国内外から一目見ようと訪れる人もいるという。
「静岡は新幹線の停車駅ではありますが、通ったことはあるけれど降りたことはないと言われてしまうこともありました。しかし、プラモニュメントが設置されるようになり、メディアでもたびたび取り上げていただくようになったことで、静岡で降りて見てみよう、時間があるから寄ってみようと足を延ばしてくれるという変化も生まれているように感じています」（堀さん）

ホビーショーに学生招待日を設けたり 18歳以上には静岡プラモデル大学も

②の人材づくりとは、プラモデル、ホビー、模型といったすべてを含めて、静岡市のものづくり産業に貢献できるような人材を育てようというものだ。これには、「静岡ホビーショー小中高生招待事業」などがある。

「静岡ホビーショー」は、毎年約７万人の来場者でにぎわう一大イベントではあるが、もとは４日間の開催（前半２日が業者招待日、後半２日が一般公開日）で、一般公開日はすぐに予約でいっぱいになることも多いという。地元の子どもたちがどうにか参加できないかと働きかけた結果、主催の静岡模型教材協同組合をはじめとしたメーカー各社の協力により、2019年から開催日が１日追加となり、小中高校生招待日が実現した。

「主催者をはじめとしたメーカー各社さんの温かい協力により実現した事業ですが、我々もお願いするばかりではなく、行政が主体となって会場と学校を往復するバスの借り上げを手配したり、アンケートを実施した結果、初期のころは混雑により製作体験をできずに帰る子どももいたことから、プラモデルキットを市が購入して製作体験できる合同体験エリアを設けるなどしています」（櫻井さん）

ものづくりキャリア教育推進事業

そのほか、「ものづくりキャリア教育推進事業」では、市内の小学生を対象に座学プラス製作体験の出前授業を模型メーカーとともに実施したり、「静岡型学校教育プログラム推進事業」では、静岡ならではの教育手法として、学校教育のなかにプラモデルを活用できないかと市内の小中学校の図工・美術の題材にプラモデルを無償提供したり、また18歳以上を対象とした「静岡プラモデル大学」という講座を開催したりなどユニークさも光る。

PTAと連携して「親子模型フェス」や認知症予防センター等で製作体験も

③のコンテンツづくりとは、プラモデルに触れることができる機会を創出しようというものだ。プラモデルファンを除き、日常的にプラモデルに触れる機会というのは、なかなか少ない。そういう人に向

静岡型学校教育プログラム（中学生作業）

静岡プラモデル大学

けてプラモデルの魅力を知ってもらう機会をつくるために、市内小中学校のPTAと連携して、親子を対象にした製作体験会「親子模型フェス」を開催したり、老人センターや認知症予防センターと連携をとり、認知症予防や余暇の過ごし方にと高齢者の方に向けたプラモデルの製作体験を実施したりもしているという。

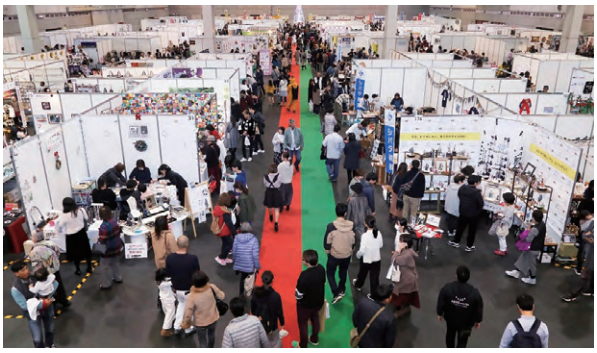
野球の甲子園、ラグビーの花園のようにプラモデルといえば静岡を目指して

こうした取り組みを経て、「静岡には、お茶、みかんに加えてプラモデル・ホビー・模型という特産品があるということを子どもたちが認知してくれ始めていることは実施してよかったと思う」と櫻井さんは語るが、その歩みを緩めることはない。昨年12月には、全国の高校生を対象とした「全国プラモデル選手権大会」の第1回開催に至った。

「様々なイベントでアンケートを実施してきたなかで、子どものころはプラモデルに触れたけれど年齢が上がるにつれ離れてしまったという声が多かったんです。大きくなってもプラモデルに熱を注いでもらえるような舞台があればと思ったのがきっかけです」（櫻井さん）

大会の目的は、プラモデルのプロモーションのみならず、ものづくりへの興味・関心の喚起、ものづくり産業を担う人材の育成、また同世代同士でものづくりをするすばらしさの普及、高校生世代への機会創出など多岐にわたる。

そのため、学生はただ作品を展示するだけでなく、



クリスマスフェスタ

プレゼンテーションをするという点が大きなポイントだ。実際、昨年の参加校の先生方からは、「プレゼンということが非常に大きな経験であり学びにつながるいい機会」との声が届いたという。

現在は、毎年12月に開催される「クリスマスフェスタ」という、プラモデルのほかクラフトや雑貨など幅広いジャンルのものづくりを楽しむ祭典のなかの1コーナーとしての同時開催であるが、ゆくゆくはこの大会が独立して開催できるようなエネルギーを持つようになることを目指しているという。

「野球の甲子園、ラグビーの花園が目標で、プラモデルといえば静岡になってほしい。そうなれば、もっと静岡に人が来てくれるのでは」（櫻井さん）

最後に、こうしたまちづくりが成功している秘訣、ポイントはどこにあるのか聞いた。

「それは行政も汗をかくことです。現在、民間の方々とはいい信頼関係を築けていますが、行政側として意識していることは、皆さんに頼むだけではなく、市としても積極的に動いて汗をかく。そういう姿の積み重ねで、信頼関係が生まれているのだと思います」（櫻井さん）

全国プラモデル選手権大会

静岡市経済局商工部産業振興課プラモデル振興係の櫻井国登さん（左）と堀郁矢さん（右）